

# ほのぼの

第61号

令和4年

7月

発 行

信行寺門信徒会

神戸市須磨区戎町1-2-3  
TEL.078-732-5209

時 を 楽 し む

前住職

われわれは時間に制限されて生きています。  
それゆえ時間はわれわれの生活の上に現れま



す。この世に命をもらいました。育てられ、働いて、老いる。

この流れで自分の与えられた時間を受け止めますと、おおよそ三つの時期に分けられるようになります。最初は時を待つ時代、次は時に追いかけられる時代、最後は時を楽しむ時代と言つてもいいでしょう。

幼少期から青年期にかけては、時を待つ時代でしよう。幼い子供が走り回るのをよく見かけます。それは早く育ちたいという気持ちの表れだそうです。はやく大人になりたいのです。「大人のように何でもできるようになりたい」というのが、若い時代の特徴の一つです。

この時期を過ぎると、生活を安定させるため、家族を支えるためにとすることで、仕事、仕事で、時間に追いかけられる日々です。さらに休む間もなく家庭サービスに、同僚などとのお付き合いがあります。人生

八十年と言われた時代ならこれで終わりですが、医療技術の進歩と生活環境の向上によつて今や百年の時代になりつつあります。

「これは新聞の「コラム欄」に出ていた記事です。カヌの国際映画祭で、倍賞千恵子さん主演の映画『プラン75』が「ある視点」部門で特別表彰を受けたそうです。その設定が衝撃的です。七十五歳以上の高齢者自身に、生きるか死ぬかを選ばせる制度（プラン75）が施行されたという日本を舞台に、翻弄（ほんろう）されていく人々を描いていると、記しています。昔「口減らし」のために年老いた親を泣き泣き姥捨て山に捨てに行くという映画があつたように記憶していますが、これの現代版というべきでしょうか。

われわれは自分の都合に合わせて、この人は役に立

つ人、二の人は役に立たない人だと生産力の有無で命を評価しがちです。なにもかも有用か無用かで物事を分ける発想だけでいいのでしょうか。与えてもらつた命であることをもう一度考えさせてもらいましょう。

この記事を読んで五十年前のことを思い出しました。毎月お参りさせてもらっていたAさんの子供

さんが亡くなられました。治療方法のない難病で何年たつても乳飲み子のように寝たままの状態の子供でした。お通夜の時、父親が言つた言葉があります。「生きていて欲しかつた。どんなに仕事で疲れて帰つてもあの子の顔を見るだけで疲れが取れた」と。今そ の言葉が蘇ります。

つい若い時と比べて愚痴も出やすくなりますが、老いは、死ぬのを待つ時代ではないでしょう。それでは悲しすぎます。そうではなく、時を楽しむのが老いの時代ではないでしょうか。無理をしないでもうちょっとだけ前に進むような気持をもって日々過ごせるのは、人生でこの時代だけのような気がします。

「弥陀仏のみやげに年を拾うかな」（一茶）

望みがないと人生は喜べません。生きていることは前に進むことです。役目があるということです。たとえ生産力になっていなくとも命に価値がないではありません。われわれが価値を見つけられないだけです。阿弥陀さまに教えていただくだけなのです。



## 第二十一回門信徒会総会

令和四年四月二十三日（土）、総会が行われました。新田会長の挨拶の後、昨年度の事業報告、今年度の事業計画案、会計報告、予算案の提案がありました。昨年度もなかなか例年通りの実施ができませんでした。今年度も、感染状況を確認しながらの実施となりますので、日時等確認の上、皆さんのご協力・参加よろしくお願ひします。今年も参加者には、一篤信者からやわらか焼とお茶をいただきました。また、多田さんから小皿の焼き物をいただきました。今回は、多田さんの焼き物の紹介をさせていただきます。

### 陶芸

多田 清子

私は週に一度、市民講座の陶芸教室に十数年通っています。また月に一度、修行寺の定例会で法話を聴聞させてもらっています。そして微力ながら門信徒会の



役員を務めさせていただいております。

四～五年前から、四月に開かれる『総会』に来てくださった方に「ようお参りくださいました」という気持ちから小皿を造りお渡ししています。四季をテーマにしたお皿です。また皆さんに楽しんで頂けるように毎回違った技法を使って造っています。

春「つくりし」先ず粘土に麻布で地模様を着け、素焼

き後に筆で土筆の絵を描いています。

夏「なみ」波模様のハンコを作り型押ししていきます。

（青海波・せいがいは）という古くから有る縁

起の良い模様だそうです。

秋「もみじ」カエデの葉を〈押し花〉

にしてから粘土に置き、上から泥状の化粧土を掛け、後にはがして形を出しています。

冬「？」次回は象嵌（ぞうがん）という方法で造るつもりです。



又皆様に使って頂けたらありがとうございます。

## 皆様に見守られて

米田 友美

今回、副住職の長男莞爾（小一）、次男一期（年長）について書く機会をいただきました。

午前五時。莞爾のアラームが鳴り響きます、自習後、ゲームや工作、テレビを楽しみます。誰にも邪魔されない彼にとって至福の時。六時。一期が起床。兄のやっていることを見て、なかなか着替えが進みません。六時三十分に父起床。三人で畠の水やりや、数年続く朝の運動・・・と、充実の時間を過ごしてそれぞれ家を出でています。

母は一期を虫網虫かご持参でお迎えに行き、虫取りしつつ帰宅。莞爾も下校すると、一人で遊んだり、各々工作したり、父とエビや虫を取ったり。夜は母の読み聞かせ、父の面白話を聞いた後、二十時消灯。毎日盛り沢山です。

週末は、莞爾は野球の練習があり、一期はそれを見なが  
らやつぱり虫取りしています。



その後は、二人で好きなアニメやヒーローをテレビで見てのんびり過ごします。

二人はいとこ達が大好きです。莞爾は、空城君と正悟君への憧れが強く、会えた時はそばを離れません。一期は、光輪ちゃん・唯華ちゃんが大好きで、膝の上から降りません。安珠ちゃん・那由ちゃんと一緒にまるで毎日一緒に過ごしているかのように仲良く遊びます。みんなが二人をとても可愛がってくれることを嬉しく思っています。

少し前まで本堂を走り回り、お勤めの間静かにさせておくのが大変だった莞爾が、今では住職達と一緒に勤めています。皆様に、いい声だったね、立派だったよと言われ、とても嬉しそうです。一期も寝てしまうときもありますが、兄と一緒に頑張っています。

皆様のお陰で、一人ともとても健やかに成長しています。今後とも愉快な二人を温かく見守っていてください。



「師主知識の恩徳・・」

法然上人②

住職



隠遁者として求道された法然上人が比叡山を下り京都吉水の草庵で布教者となつていかれたことで「大原問答」以後、信者・門弟が徐々に増えていきました。その中でも特に有名なのは後に閑白となる九条兼実です。法然上人の熱烈な帰依者となり何度も受戒して生涯を通じて法然上人を支えていきました。また、一ノ谷の合戦で有名な熊谷直実などの鎌倉武士がこそつて帰依者となり専修念佛を実践していきます。戦場での修羅場を経験し、自身の罪業に対する恐れを多少なりともいだいていた武士に、「専ら南無阿弥陀仏と称えなさい。必ず浄土に往生できます。」という専修念佛の教えは大きな救いとなつていきました。

また法然上人五十八歳の時、当時再建中の東大寺で三日間にわたり「淨土三部經」の講義をおこない

ました。南都各宗の碩学の見守るなか、称名念佛こそ全ての者が救われていく道であると説かれました。そのころより、後に主な門弟となる証空、隆寛、聖光などが法然上人のもとで学ぶことになります。また、親鸞聖人が法然上人の門下に入られるのは法然上人が六十九歳の時なので、弟子の中では比較的新しいお弟子でありました。

このように法然上人の五十歳代後半から六十歳代は多くの弟子を育てていかれる躍進の時代ですが、六十五歳の時に少し重い病気になられたようですが、法然上人に万が一のことがあつた場合のことも考え、念佛の肝要を書いてほしいという九条兼実の強い願いに応えて翌年「選択本願念佛集」を執筆されました。この「選択集」は門外不出の書として数人の弟子以外には見せませんでした。しかし法然上人七十三歳の時、親鸞聖人は弟子入りして四年しかたつていないにもかかわらず、法然上人に認められて「選択集」を写すことを許されました。書写を許されたのは、門弟の中で六名だけです。

(続く)

# 法語カレシダード

かさ、本当にそんな自分であつたと気づくほどついことはありません。



我が身を深く  
悲しむ心に  
仏法のことばが

郷音く

今回は、八月の法語を紹介します。宮城顕先生の著書「真宗の基礎」からの言葉です。

「（仏法から）いかに自分が遠くあるかと、我が身を深く悲しむ心に仏法のことばが響くのであって、自分はいちばん仏法の近くにおり、仏法をよく知っている、我よりほかは存知したものはなしと、そう思いあがつている者はいよいよ仏法から遠くなる。」と書いておられます。

私達は、無意識に自分を飾りながら、人によく見られたいと生きていています。むさぼり、いかり、おろ

かさ、本当にそんな自分であつたと気づくほどついことはありません。  
阿弥陀さまのご本願を理解できたから安心できるのではなく、わからないというそのままを阿弥陀さまはお救いくださります。私達は阿弥陀さまの仰せを素直に受け止めればいいのです。しかし、驕慢なこころが邪魔をして、なかなか素直に受け取れません。「驕慢」とは自分は何でも知っているという思い上がりのこころです。  
「正信念仏偈」には、

弥陀仏本願念佛  
邪見驕慢惡衆生  
邪見・驕慢の惡衆生

信樂受持甚以難  
難中之難無過斯  
難のなかの難これに過ぎたるはなし

とあります。

よこしまなものを見方や思い上がった気持ちのある私達が阿弥陀さまのご本願のはたらきを受け取っていくことは、難しいことである。世の中で難しいものと言われるの中でも最も難しいことだとお示しくださっています。

# 日頃の疑問を考えよう

Q

先日、テレビに出ていた作家さんが、「他力本願、みんなのおかげで書くことができました。」と話していました。他力本願とは、自分以外の他人の力のおかげ、あてにするという意味で使う言葉なのでしょ

A

これは、大変誤解されて本来と違う意味で使われている言葉です。親鸞聖人は、「教行信証」に他力というは如來の本願力なりと明示しています。だから、他力とは他人の力ではなく、仏の力、阿弥陀仏の慈悲のはたらきをいうのです。生きとし生けるものを救わずにいる強い願いのはたらきを他力本願というのです。

私達が普段使っている言葉の中には、元をたどれば仏教語という言葉がたくさんあります。その中には、本来の意味と違う意味で使われている言葉がいくつもあります。今回は、「えんぎ・我慢」を紹介しましょう

えんぎをかつぐ、えんぎが良い、悪いな

どと（吉凶のきざし）という意味でしょうか？）いう言葉を聞きます。えんぎとは、

縁起と書く仏教の根幹をなす言語です。この世の一切の出来事は、必ず原因（因）と縁とがあり、それを因縁生起＝縁起といいます。因と縁と果（結果）が複雑に関係しあい影響しあって、もちつもたれつの状態をつくっています。他の多くのものの力、恵み、お陰を受けて私達は生かされているという仏教の教えなのです。

我慢とは、堪え忍ぶこと、辛抱することを示し良い意味に使われています。しかし、仏教語の我慢はあまり良い意味ではありません。自己中心に「我」があるとの考え方から、我をたのんで自らを高くし、他をあなどります。そのようなおこりたかぶる心を七つ挙げ、「七慢」と称し、その中の一つが我慢です。それが現在のような意味に変化したようです。



# 信行寺行事予定とご案内

## ◆本堂納骨お盆法要

八月十六日（火）午後二時～

## ◆夏期特別法座

八月十八日（木）十一時～十五時

今年度は、先着三十名のみとさせていただきま  
す。ご希望の方は早めに申し込みください。

## ◆秋の彼岸法要

九月二十四日（土）午後二時～住職

二十五日（日）午後二時～前住職

## ◆西大谷納骨参拝

十月十六日（日）

納骨・参拝希望の方お申し出ください。

今年度も、新型コロナウイルスの影響で、予定を  
変更するかもしれません。確認の上、ご参加頂き  
たいと思います。

編集委員より

今年の春、孫は社会人の一員となりました。コロナウイルス  
感染騒動の三年間、期待していた勉強は満足にできただろ  
うか。これまでの経験を生かし、新たな心構えで社会を学んでほ  
しいと望んでいます。

前住職が過去にお話された法話が「今日も一日ありがとうございました」  
の本になりました。分かりやすく読みやすく書かれています。  
その中から私が歩んだ道の話を交えながら「三つの坂」につい  
て孫に話をしました。人生誰もが越えて行かねばならない関所  
ともいえる未知の坂は、「上り坂」「下り坂」さらに「まさか」  
があり、おごり・過信・苦しみ・予期せぬ出来事がある。人生  
この先どの道に進めば良いのか岐路に立つ時、過去の反省と周  
囲のアドバイスに耳を傾ける謙虚な心が大事である。私は、下  
り坂・まさかの繰り返し、でも今は有り難く如来さまのお力を  
頂いていると思う日々に感謝していると。

礼拝堂に前坊守の書「一度きりの尊い道を今あるいている」  
が掲げられています。この言葉を心に刻み、悩み・迷った時、  
「今日も一日ありがとう」の本を読み、将来進む道標にと願つ  
ているのです。

今、自分が生かされていることに感謝、ご先祖はじめ家族・  
ご縁があつた人達へのご恩は決して忘れません。「ありがとうございます」  
の心を



新谷 勝